

平成 22年 6月 1日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520445
 研究課題名 (和文) 認知言語学の日本語教育への具体的導入—日本語教科書改善のために—
 研究課題名 (英文) How the Cognitive Linguistic Perspectives might be incorporated into the Teaching of Japanese language—in search for better teaching materials—
 研究代表者
 近藤 安月子 (KONDOH ATSUKO)
 東京大学・大学院総合文化研究科・教授
 研究者番号：90205550

研究成果の概要：中国で刊行された日本語教材および中国語を母語とする日本語学習者の産出する日本語の分析を通して〈主観的な事態把握〉の概念の日本語教育への示唆を目的とした。日本語母語話者の主観的事態把握の指標となりうる言語形式を特定し、日本語母語話者、中国語母語日本語上級学習者、中国語母語日本語初中級学習者を対象に対照言語調査を実施した。調査結果の量的質的分析により、中国語母語日本語学習者の事態把握が日本語母語話者のそれより客観的傾向があることを明らかにした。その結果をもとに、日本語教材に必要な改善点を提案した。

研究成果の概要 (英文)：

The purpose of the project was to identify the construal type of the Chinese-native learners of Japanese language and to propose that the cognitive linguistic perspectives should be incorporated into Japanese teaching materials. The research hypothesis was that the construal type of the Chinese-native learners of Japanese would tend to be more “objective” than that of the Japanese native speakers. We conducted surveys on Japanese teaching materials published in China and also on the Japanese language produced by the Chinese-native learners of Japanese and by the Japanese native speakers. Both the quantitative and qualitative analyses of the results showed that the research hypothesis was supported, and we proposed how the Japanese teaching materials should incorporate the cognitive linguistic perspectives on differences between the two languages.

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：対照言語研究

1. 研究開始当初の背景

中国語母語の日本語学習者対象の教材にみる日本語記述と中国語母語日本語学習者の産出する日本語にいわゆる日本語としての自然さを欠くものが多いことに着目し、中国語母語日本語学習者の産出する日本語がいわゆる日本語母語話者にとっての〈好まれる言い回し〉(Whorf, B. L. (1956[1939]))から逸脱する傾向にあるのではないかと考え、本研究の立案に至った。

2. 研究の目的

中国語母語日本語学習者の産出する日本語に見られる、日本語の好まれる言い回しからの逸脱は池上(2007)の〈事態把握〉の傾向差によるものであるという仮説のもとに、中国で編纂された日本語教材を調査するとともに、中国語母語日本語学習者の〈事態把握〉の傾向を探り、日本語教材への認知言語学的概念の導入の必要性を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

3.1 教科書調査

中国で編纂された日本語教材を対象として、日本語教材に見られる日本語の〈好まれる言い回し〉の逸脱の調査を試みた。調査対象としたのは以下に挙げる5種、10冊で、1990年代から2000年代の比較的新しい教科書まで、中国で編纂・出版された初級教科書である。

『新編日語1』(1993) 上海外語教育出版社

『新編日語2』(1994) 上海外語教育出版社

『基礎日語教程第1冊』(1998) 外語教学与研究出版社

『基礎日語教程第2冊』(1998) 外語教学与研究出版社

『新大学日本語第1冊』(2000) 大連理工大学出版社

『新大学日本語第2冊』(2001) 大連理工大学出

版社

『新編基礎日語改訂版1』(2004) 上海訳文出版社

『新編基礎日語改訂版2』(2004) 上海訳文出版社

『現代実用日語(基礎編)1』(2006) 高等教育出版社

『現代実用日語(基礎編)2』(2007) 高等教育出版社

3.2 アンケート調査

中上級から上級の中国語母語日本語学習者と日本語母語話者を対象にしたアンケート予備調査、初級修了から中級の中国語母語日本語学習者を対象としたアンケート本調査を実施した。

実施にあたって、日中両言語の〈事態把握〉の違いが反映する可能性のある言語項目として(1)にあげる①~⑧を調査対象に選定し、さらに聞き手との関係の捉え方を示す項目として⑨⑩を加えた。

- (1)①〈私〉〈あなた〉、②〈移動〉、③〈動詞の自他〉、④〈受身〉(直接受身、間接受身)、⑤〈授受〉、⑥〈感情・感覚〉、⑦〈無助詞〉、⑧〈コト的把握〉、⑨〈誘いかけ〉、⑩〈申し出〉

これら10項目について計21問のアンケート形式による質問票を作成した。21問の内訳は、ある会話中の発話として示された複数の選択肢についてその適切性を判断する課題14題、空所を埋めて会話を完成する課題3題、一連の会話が表す状況を日本語で記述する課題1題、イラストが表す状況を描写する課題3題である。このうち、イラストを描写する課題は、日本語だけでなく中国語でも描写するように指示した。

上記の質問票を用いて、まず 2008 年 1 月 1 日から 31 日の間に日本在住の中国語母語日本語学習者（中上級から上級の大学生）32 名、日本語母語話者 57 名（大学生）を対象に予備調査を実施した。本調査は、予備調査を踏まえ、2008 年 6 月と 9 月に、中国在住の中国語母語日本語学習者（初級修了から中級の大学生）330 名を対象に実施した。

いずれの調査についても、調査協力者の背景情報を含む調査結果をデータベース化し、適切性判断課題では、各選択肢の適切性判断平均値を統計処理（U検定）して、母語話者による判断との差が有意かどうかを見た（有意水準 $0.05 > p$ ）。中国語記述課題については逐語的に翻訳した上で、自由記述課題とともに、回答を類別し分析を行った。

本調査の分析では、予備調査の結果を参照しつつ、適切性判断課題の結果に量的分析を施し、自由記述課題および中国語記述課題については、中国語母語日本語研究者の協力の下に、質的分析を行った。

4. 研究成果

4.1 教科書調査の成果

調査対象とした日本語教材の中には、日本語母語話者には不自然に感じられる例文・記述が多数観察された。その不自然さは、多くの場合、文法性の問題というより、いわゆる日本語の〈好まれる言い回し〉を逸脱していると感じられるものである。

日本語話者に〈好まれる言い回し〉として〈主観的把握〉による言語化がある。すなわち、日本語では、「話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように〔自己投入〕体験的に事態把握をする」（池上 2007）。

また日本語の話者は、聞き手を自身と同様の認知的主体と捉え、聞き手と自身とが共同注意

に基づいた共同主観的關係にあるとして、〈私たち〉の周りに出来る事態を共に主観的に把握する。

中国で出版された教科書10冊を調査したところ、その会話・読解文・練習問題・解説用例文には、私の明示、他者の感情や感覚・認識についての直接的記述、話し手の内面についての客体化した表現など、〈客観的把握〉を反映していると思われるものが多数観察された。

これらはいずれも、話し手が事態に距離を置き、話し手自身をも他者と同様の客体として捉えようとする把握のし方を反映しており、中国語の事態把握の特徴を日本語に持ち込んだものではないかと考えられる。

また、共同注意の態勢にあつて、共同主観的に事態を捉え言語化しようとする日本語話者の〈共同注意〉の概念が教科書に反映されていない。たとえば、(1) 共同注意態勢にある聞き手の注意を話し手が注目するモノ・コトガラに喚起するという無助詞の機能、(2) 話し手が一つの〈見え〉を掲げ、聞き手に共同注意を促し、聞き手に、その〈見え〉に関連した談話のイマ・ココのもう一つの〈見え〉に気づくように求めるノダの機能、(3) 話し手が聞き手の注意を喚起したり、聞き手にイマ・ココに出来た自身の感情や事実の把握を共有することを求めたりする終助詞の機能には、十分な注意が払われていない。

教科書に観察された不自然な例文・記述は学習者が母語中国語における事態把握を日本語産出に援用しようとする傾向を助長して、日本語の〈好まれる言い回し〉から遠ざけ、〈好まれない言い回し〉を誘発する原因のひとつになっているのではないかと考えられる。

このような不自然さの改善のためには、日本語教科書のシラバスを司る基本概念として、教科書の記述に〈主観的把握〉の視点、および日本語話者の〈共同注意〉に基づく〈間主観的〉あるいは「共に語る」という概念をシラバスの中心的な軸の一つに位置付けることが有効であ

ろう。

これらの基本概念は、会話文作成、読解本文作成、各学習項目の解説文作成とその例文選択、また練習作成、挿絵やイラストなどの練習キューの選択、そのすべての作業段階を貫く柱として教科書編纂者が意識すべきものである。そのように編纂された教材が、中国語を母語とする学習者による日本語の〈好まれる言い回し〉の理解と学習を支え、その産出する日本語を〈好まれる言い回し〉に近づけてゆくものであると考える。

4.2 アンケート調査の成果

中国語母語日本語学習者の産出する日本語に、いわゆる日本語母語話者にとっての〈好まれる言い回し〉からの逸脱の傾向が観察されるであろうという予測のもとで3.2(1)に挙げた10項目について調査を行ったところ、以下の結果が得られた。

A. 以下の8項目においては、概ね予測どおりの有意差が観察された。

- ①〈私〉〈あなた〉、②〈移動〉、③〈動詞の自他〉、④〈受身〉のうち(直接受身)、⑤〈授受〉、⑥〈感情・感覚〉のうち意図的情意の表出、⑨〈誘いかけ〉、⑩〈申し出〉

これらの項目では、中国語母語日本語学習者の産出する日本語に観察される〈事態把握〉は、母語話者よりも主観的傾向が低く、また上級学習者の産出する日本語では初中級学習者より日本語母語話者に近い〈事態把握〉傾向が観察された。

B. ⑥〈感情・感覚〉のうち自然反射的情意の表出では、「日」「中」いずれも主語〈私〉を明示せず、臨場的・体験的に事態把握を行っており、その点では、仮説・予測が支持されなかった。ただし、自然反射的表出の表現方法としては、「日」は感覚形容詞一語文を、

「中」は感嘆詞(あるいは感嘆詞+α)を使用する明らかな傾向を示した。

C. ④〈受身〉のうち(間接受身)、⑦〈無助詞〉、⑧〈コト的把握〉については、必ずしも仮説を確認することはできず、日本語母語話者の世代間で事態把握の傾向が異なっている可能性を検討することが課題として残された。

上記Aの8項目について、中国語母語日本語学習者の産出する日本語に観察される〈事態把握〉では日本語母語話者のそれよりも主観的傾向が低いことが観察されたことから、日本語と中国語の事態把握の傾向に関する本研究の仮説は概ね支持されたと言える。Aの8項目に関して、中国語母語日本語学習者向け教材に〈事態把握〉による違いの具体的な記述の必要性を提案した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- (1) 近藤安月子・池上嘉彦・姫野伴子・足立さゆり・王安(2010)「中国語母語日本語学習者の事態把握—日本語専攻学習者を対象とする調査の結果から—」『日本認知言語学会論文集』10巻、pp.690-709
- (2) 池上嘉彦(2009)「日本語教育における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉」『日本語文化研究』第8巻
- (3) 近藤安月子・姫野伴子・足立さゆり(2009)「中国語母語日本語学習者の事態把握—日中対照予備調査の結果から—」『日本認知言語学会論文集』第9巻、pp.1-11
- (4) 近藤安月子・姫野伴子(2008)「日本語教科書に見る事態把握の傾向—中国で出版された教科書を例として」『日本認知言語学会論

[学会発表] (計 5 件)

- (1) 近藤安月子・姫野伴子 (2009) 「中国語母語日本語学習者の事態把握と『総合日語』」、国際シンポジウム「認知言語学の拓く日本語研究と日本語教育研究」、2009年10月17日、北京大学(北京)
- (2) 池上嘉彦 (2009) 「認知言語学的展開とは何か(招待講演)」、国際シンポジウム「認知言語学の拓く日本語研究と日本語教育研究」、2009年10月17日、北京大学(北京)
- (3) 近藤安月子・池上嘉彦・姫野伴子・足立さゆり・王安 (2009) 「中国語母語日本語学習者の事態把握—日本語主専攻学習者を対象とする調査の結果から—」日本認知言語学会第10回大会、2009年9月26日、京都大学(京都)
- (4) 近藤安月子・姫野伴子・足立さゆり (2008) 「中国語母語日本語学習者の事態把握—日中対照予備調査の結果から—」日本認知言語学会第9回大会、2008年9月13日、名古屋大学(名古屋)
- (5) 近藤安月子・姫野伴子 (2007) 「日本語教科書に見る事態把握の傾向—中国で出版された教科書を例として」日本認知言語学会第8回大会、2007年9月23日、成蹊大学(東京)

[図書] (計 1 件)

- (1) 池上嘉彦他編 (近藤安月子・姫野伴子他、分担執筆) (2009) 『自然な日本語を教えるために 認知言語学をふまえて』、ひつじ書房、227頁

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

なし

○取得状況 (計 0 件)

なし

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 安月子 (KONDOH ATSUKO)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号： 90205550

(2) 研究分担者

◎池上 嘉彦 (IKEGAMI TOSHIHIKO)
昭和女子大学・文学研究科・教授
研究者番号： 90012327

◎姫野 伴子 (HIMENO TOMOKO)、
明治大学・国際日本学部・教授
研究者番号： 00228751

◎足立 さゆり (ADACHI SAYURI)
白百合女子大学・文学部・教授
研究者番号： 32627201

(3) 連携研究者

なし

研究協力者

- ◎王 安 (Wang An)
島根大学・外国語教育センター・講師
- ◎彭広陸 (Peng Guanglu)
北京大学・外国語学院・教授
- ◎孫敦夫 (Sun Dunfu)
西安外国語大学・東方語言文化学院・教授